

平成8年度心身障害研究  
「生涯を通じた女性の健康づくりに関する研究」

女子高校生を取り巻く環境要因とテレクラとの関係に関する調査  
(分担研究：女性からみた妊娠、出産に関する研究)

分担研究報告書

分担研究者 北村 邦夫 (日本家族計画協会クリニック)  
研究協力者 桜井 賢樹 (国立国際医療センターAIDS医療情報室)  
東 優子 (お茶の水女子大学大学院人間文化研究科)  
兵藤 智佳 (東京大学大学院教育学研究科)  
高井 明子 (東京大学医学系研究科)

要約

ここ数年間に急速に発達してきた「テレフォンクラブ(以下、テレクラ)」は、若者が身近に利用する電話を最大限に利用するものであるが故に、若年層の身体的・精神的健康面に与える影響が懸念されている。高校生とテレクラの実態調査については、これまでも総務庁、あるいは各地方自治体が統計的資料を提出しているが、質的調査はほとんど実施されていない。本研究では、女子高校生にフォーカス・グループ・インタビューを実施し、彼女たちの生活とテレクラの位置関係を検討した。最近のマスコミでは、テレクラと女子高校生の性行動(それに伴う金銭の授受)が取り上げられるケースが多い。しかし、本調査に参加した女子高生の多くが「遊び」として1~2度体験しているだけであると答えており、これまでの統計資料とほぼ一致する結果が得られている。注目すべきは、実際に「援助交際」を経験している者もいるが、性感染症などの問題についてや、何らかの危険にさらされた場合の相談・支援システムの必要性に関する認識が希薄であったことである。本論では、インタビュー調査によって浮き彫りになった様々な問題を検討すると共に、彼女たちの健康を保障する上で「エンパワーメント(自ら力をつけること)」が果たす役割とその重要性について考察する。

見出し語：テレクラ、女子高生、グループ・インタビュー

研究目的および方法

背景および目的：わが国における性情報の氾濫及び性産業の発達、文化や娯楽等の社会活動に様々な影響を与えていることは明らかである。特に、ここ数年間に急速に発展してきた「テレクラ」「伝言ダイヤル」「ツーショット・ダイヤル」といった産業は、すべて若者が身近に利用する電話(携帯・PHS)やポケベルが最大限に利用されるものであるが故に、若年層の生活や健康面に与える影響が懸念されている。

こうした憂慮を反映し、これまでも青少年のテレクラ等の利用・接触実態については、総務庁青少年対策本部(1996)<sup>1</sup>や東京都(1996)<sup>2</sup>を始めとする地方自治体が調査を実施している。これらは全て調査紙法による量的データ分析であるが、それらの結果を高校生についてのみ抽出しな

<sup>1</sup> 「青少年と電話などに関する調査研究報告書」総務庁青少年対策本部、平成8年8月。

<sup>2</sup> 「中・高校生の生活と意識に関する調査(中間報告)」

おすと、以下のようなになる（空欄は該当データなし）。

	総務庁調査 岩手・埼玉・愛知・ 和歌山・鹿児島 の5地区		東京都調査	
	高校生女子 (660名)	高校生男子 (533名)	高校生女子 (527名)	高校生男子 (237名)
自分専用の電話回線を持っている			11.9%	10.0%
自分専用のポケットベルを持っている			17.6	42.6
自分専用の携帯電話やPHSを持っている			8.5	7.1
「テレクラ」という言葉の意味がわかる	90.6	86.0		
「ツーショット・ダイアル」という言葉 を聞いたことがある	54.9	56.2		
テレクラ・伝言ダイアル・ツーショット ダイアルなどに電話したことがある	27.3	6.6	36.0	10.8

統計的な有意差が確認されたわけではないが、岩手県・埼玉県・愛知県・和歌山県・鹿児島県の5地区を対象とした総務庁の調査結果と東京都の調査結果には若干の格差が見られ、都市過密地区において利用者数がより高くなる可能性が示唆されていると言えよう。また、テレクラやツーショット・ダイアルに電話をした頻度については、「1回だけ」「2～3回」を合わせると66.0%になっており、どんなものか試しにかけてみた者が多いと考えられる。また、電話をかける時の状況としては、だいたい友達と一緒に(83.7%)、公衆電話から(75.1%)かけられることが多い(総務庁, 1966)。

特に、高校生男子よりも女子の利用頻度が顕著に高くなっている点については、テレクラ等に関する情報接触経験、及び利用に伴う料金システムが男女で異なる点が強く影響していると思われる。すなわち、情報接触経験については、全体の75%が「街頭で配られるポケットティッシュ」と答え、回答率の高かった順は女子高生で91%、女子中学生で77%と続く。さらに、女子がテレクラを利用できるのに対し、男子に対してはサービス料が請求されるシステムであることから、気軽に受話器を持てるのは当然女子ということになるだろう。

高校生におけるテレクラ利用の実態調査が実施される背景には、〈テレクラ=不良・非行行動の可能性〉という社会的懸念がある。このことは、上記の総務庁調査において、「不良・非行行動」についてテレクラ経験者と未経験者で比較する方法が用いられている点から明らかである。また、テレクラや伝言ダイアルの利用と結び付けてしばしば語られるのは「援助交際」というモラル的「行為」<sup>3</sup>である。実際、マスコミが「援助交際」「ブルセラ」「女子高生デートクラブ」といった話題を報道する際に「東京都の女子高校生の36%がテレクラ利用経験者」といった実態調査結果をあたかも論証の一つとして扱っている事実は、これらを因果関係として位置づけていることを意味していると思われる。しかし、実際にはほとんどが「1～2回試してかけてみただけ」ということからみても、懸念される利用目的とその実態がかなり異なっていることが示唆されたと言えよう。

<sup>3</sup> 「援助交際」は、現代の大人社会（男性）と子ども（女子高生）のコミュニケーション状況を表わすものであり、従来の「売春」ではなく、現代の売春的なものの多様性を示すものであるという考え方については、性の権利フォーラム編著「『淫行条例』13の疑問：少女売春はなくせるのか!？」(p.53)に示されている。

本研究がテーマとする「女性と健康」に影響を与える変数として「テレクラ利用」を考察する場合、必ずしも「健康」を性的（身体的）側面に限るものではなく、精神的側面も含めて考える必要がある。「試してみただけ」が66%を占めることは、テレクラの「物理的手軽さ」と「心理的手軽さ」を示唆するものである。そして、こうした「手軽さ」が女子高校生の様々な潜在的被易災性 (vulnerability) と相互作用し、結果として「健康」に悪影響を及ぼす可能性がある。そこで本研究では、現代の女子高校生を取り巻く環境の中で、テレクラ、ポケベルなどを始めとする流行行動の背景にある社会学的・心理学的要因とテレクラに関する関心との関係を探る。

方法： <対象>神奈川県下の公立高校に通う女子高生34名（1年生20名・2年生14名）。平均年齢は16.17歳（年齢幅は、15～17歳）。<調査方法>調査者3名が学校を訪問し、調査への協力を了解した34名を、学年を考慮した上で無作為に3グループ（1年生10人×2、2年生14人×1）に分けた。各グループに調査者1名がファシリテーターとして参加して、フォーカス・ディスカッションを実施した。テレクラ利用経験者の一部については、グループ・ディスカッション終了後に、同意を得た上で、個別インタビューを実施した。尚、参加した女子高生の基本的な性行動とテレクラ利用状況を調べるため、11項目からなる質問紙を作成。参加者はグループ・ディスカッション開始直前に無記名で回答し、調査者が直接回収した。回答率100%。  
<調査時期> 1996年12月10日。

結果と考察

1. 質問紙調査

今回の調査は統計的処理を目的としておらず、あくまでも、フォーカス・グループ・ディスカッションに参加した女子高校生のバックグラウンド情報を得ることを目的としたものであるため、統計処理は行っていない。本調査の結果を前出の東京都調査および総務庁調査で得られた結果と比較すると、テレクラに電話をした経験において、本調査回答者が55.9%と、東京都調査の36.0%をかなり上回っていることがわかった。性行動については、(財)日本性教育協会 (JASE) が実施した調査<sup>4</sup>との比較においても、特に突出した特徴はみられなかった。

Q1あなたは自分専用の電話を持っていますか？

	今回の調査 (N=34)	1年生	2年生		東京都調査 (N=527)
はい	3 (8.8%)	2	1		11.9%
いいえ	31 (91.2%)	18	13		

Q2あなたはテレクラに電話したことがありますか？

	今回の調査 (N=34)	1年生	2年生		東京都調査 (N=527)
はい	19 (55.9%)	11	8		36.0%
いいえ	15 (44.1%)	9	6		

<sup>4</sup> 「青少年の性行動：わが国の中学生・高校生・大学生に関する調査報告（第4回）」日本性教育協会、1994。

Q3何回くらいテレクラに電話をしたことがありますか？

	今回の調査 (N=19)	東京都調査 (N=180)	総務庁調査 (N=238)
1回だけ	21.0%	17.8%	21.7%
2～5回	42.1	45.1	(2～3回) 46.7
6～10回	1	15.2	(4～9回)
11～20回		5.2	20.6
20回以上	21.0	13.6	(10～19回)
NA	5.3	3.8	3.9
	5.3		7.2
	5.3		

Q4 あなたは今までにデートをしたことがありますか？

	今回の調査 (N=34)	JASE全国調査* (N= )
はい	55.9%	43.4%
いいえ	41.2%	52.1%

\*JASEの調査結果から15～17歳の女子に関するデータについてのみ再計算したものを使用。無回答を含めていないため、合計が100%となっていない。

Q5今までに性的な意味でキスの経験がありますか？

	今回の調査 (N=34)	JASE全国調査
はい	26.5%	25.9%
いいえ	70.6%	65.3%

Q6性交経験あるいはそれに近い経験がありますか？

	今回の調査 (N=34)	JASE全国調査
はい	26.5%	11.7%
いいえ	73.5%	79.4%

Q7学校や親から性教育を受けたことがありますか？

	今回の調査 (N=34)	JASE全国調査
はい	91.2%	95.9%
いいえ	8.8%	2.5%

Q8性に関する情報は主にどこから入手しますか？（複数回答）

	今回の調査 (N=34)	JASE全国調査*
一般雑誌	88.2%	47.0%
テレビ・ラジオ	88.2	48.3
マンガ・コミック	47.0	46.0
ポルノ雑誌	8.8	

\*JASEの調査では、友人(63.5%)が最も多かったが、本調査では「親・友人・学校」以外のリソースについて質問しているため、ここでは特に記載していない。

## 2. フォーカス・グループ・インタビュー

今回の調査に参加した対象者は、全員がテレクラの存在を認識していただけでなく、55.9%の利用経験者が含まれている。経験者の多くは、「小学校の時から知ってる」「小学生の時にかけたことがある」「テレクラって、今より中学校の時に流行ったもんね」というように、「過去に好奇心で数回かけてみただけ」という者が半数以上であった。また、現在も利用しているという女子学生が各グループに2~3名含まれていたが、利用者と非利用者、あるいは経験者と未経験者との間で発言回数に違いは見られず、テレクラの存在の是非論に至った場合にのみ立場の違いが顕著になった以外は、総じて意見の対立も見られなかった。

「遊び」：テレクラへ電話する理由 最近の風潮として、テレクラについては、そこに金銭の授受が伴うか否かにかかわらず、「性的な行為をする相手を求める場」という文脈で語られることが多く、女子高生についてもその対象外ではない。しかし、先述の総務庁・東京都の調査結果と同様に、本調査の結果からも、実際には「好奇心から1~2度かけてみただけ」という女子高生が多いことが確認された。「こっちは遊び感覚なのよ、本気じゃない」「ちょっと試してみようかと、むこうに何があるんだろうみたいな」「男の方は会うのが目的だけこっちは遊び感覚、ただの好奇心」参加者のほとんどが、利用経験の有無にかかわらず、テレクラが性的な出会いを提供する場として認識しているようである。ただし、マスコミで取り上げられる「女子高生とテレクラ」というイメージについては、懐疑的な反応が圧倒的であった。テレクラについては、電話をすることに目的があるのであり、実際に相手と会うかどうかはオプションでさえもないことを強調する参加者がほとんどであった。

「そういう人もいるだろうけど…」

「言われてる高校生のイメージって、ほんの一部しか起こってないことなのに、みんながやっているように言われるのはハラ立つよね」

「でも、隠れてやってるんだよ、みんな」

「知らないけど、真面目そうに見える人でも、言わないでやってたりするよ」

彼女たちの言う「一部のそういう人たち」とは誰かという質問に対して、「わかんないけど、

都心の女子校生とか」という曖昧なイメージが示された点については、彼女たちが懐疑的であるマスコミ情報に、彼女たち自身もまた影響されていることを示している。

「取りあえず（相手の男性に）『町田のナンとかで…』とか言って、そこへみんな（あるいは二人連れ）で行って、陰から見てるの。そんでナンか、『やめようぜエ』とか言って帰んの。」 数的実態調査同様に、本調査でも「初めて電話をした時は、一人ではなく複数で」というケースが多く聞かれ、友達との「悪ふざけ」の延長線上にある行為であるケースが最も多いことが確認された。女性の利用は無料である上、匿名性が守られる安心感は、ちょっとした好奇心を満たすには絶好の条件に違いない。しかし、電話で指定した待ち合わせ場所に現れた男性を物陰から見るといった行為には、無邪気さよりも、「テレクラに電話をする男性」に対する蔑視が込められているような印象を強く受ける。

「なんか、なんか、オンナのことで頭が一杯って感じでイヤだ」「っていうか、そこにいる男自体の甲斐性がイヤだ」「こっちはバカにしてんのにさ、それなのに喜んでしゃべってる…ああ、私よりバカな奴がいるんだなって（優越感にひたれる）。」

参加者の「テレクラ男性」に対する否定的感情は、ポケットベル（以下、ポケベル）を通じて知り合う男性を語る彼女らのコメントと比較した場合にも明らかである。参加者におけるポケベル携帯率は、最も多い2年生グループで38%程度と高くないが、携帯者にとっては「なかったら死ぬ」ほど大切なものであり、友達との連絡を取るためだけでなく、テレクラ同様に見知らぬ相手と出会うために使用されていることが明らかになった。「（ポケベルを使ってない人は）真面目だから」というコメントの裏を返せば、ポケベルを利用して男性と知り合うことは、ある種の「不良っぽさ」がニュアンスとして含まれていることを、彼女たち自身が認識していることを意味しているように思われた。適当な番号を入力し、その相手とメッセージを交換した後に待ち合わせをするというシステム自体は、テレクラのそれと相違ないように思えるのだが、彼女たちの中では確固たる一線が引かれているのが興味深い。

「軽いカンジで、友達になろうってカンジ」

「テレクラやっている人って気持ち悪いけど、ベルやってる人って軽いカンジ」

「テレクラにいるオトコって性的な目的だけど、ベルのオトコって友達になろう、これからもヨロシクってカンジ」

相手の男性については、彼女たちと年齢が近いケースが多い。そのことが「オンナのことで頭がいっぱい」のテレクラ男性に対する警戒感とは逆に、ポケベル男性に対しては無防備とも思える安心感を抱かせている理由の一つと思われる。こうした男性に対するラベルづけ、および差別化が存在することは興味深く、単なる「遊び」で終わるテレクラよりも、むしろ実際の「出会い」に結びつく可能性の高いポケベルの実態を調査する必要性が示唆されたと言えよう。また、こうした差別化がもたらす「健康」問題にも留意する必要がある。ある特定集団に対する差別意識やスティグマ化が、社会の「健康」を守るのではなく、逆に問題の本質を見落とすことによって、さらに大きな「健康」問題となって跳ね返ってくることは、疫学・公衆衛生学研究で繰り返し指摘されていることである。

「他人事」：テレクラ利用者への態度

一時期マスコミで頻繁に取り上げられ、社会的に一般化される「女子高生とテレクラ」のイメージについて嫌悪感を表わす参加者が多いと同時に、その実態の不確実性を強調する意見が多く聞かれた。「ほんの一部しか起こってないのに、みんながやってるように言われてる。」「女子高

生っていうだけで、テレクラって言われるのイヤだ」「(マスコミで)特集とかやってる人って、面白半分じゃない？」

「(言う方も言われる方も)両方が楽しんでるんだったら、別にいいんじゃない。」テレクラへ電話すること自体に対する価値判断については、あくまでも「個人的な問題」であるという意見が多く聞かれた。一方、「良くない、やめたほうがいい」と述べた参加者者については、「親や親戚に迷惑がかかるから」というのがその主な理由として挙げられており、自らの倫理として言及した者は見られなかった。このことは、友人の中にテレクラを利用している友達がいても、それについて積極的に否定しないという態度に反映されていると思われる。「別に自分はいいけど、やりたきゃやればいい。」「自分がいいならいいんじゃない、自分で責任持てれば。」

他人事には干渉しないという態度は参加者に共通して見られたが、マスコミで言われているような女子高生とは一緒にされたくないというコメントに対して、参加者に含まれていた「利用者」が苦笑いする場面が見られた。実際に利用しているか否かに関わらず、「他人は他人、自分は自分」という彼女らの態度は、実際に何らかの問題が生じた際に「自業自得」論で片づけてしまう素地を形成している。この点については後に詳しく述べる。

「需要と供給」：テレクラの経済性 あえて「テレクラが存在することの利点」について尋ねてみたところ、「テレクラなんて存在価値ない」という意見も少なくなかったが、「ティッシュを買わなくてもすむ」という他愛のない答えの他には、「お金をもらえる」ことが唯一の利点として挙げられた。「テレクラって需要と供給の問題」「お金が欲しいってやるコと、女子高生と遊びたいって言う人が両方いるんだからお互い

にとってマイナスはない」「(テレクラ)いらないってコもいるけど、いるってコもいるんだよ」今回の調査に参加した女子高生のお小遣いは月平均1万円であったが、実際にはそれ以上のお金を必要とするのだ、と参加者は口を揃える。物質社会の洗礼を受けた彼女たちにとって、欲しい物に食欲になることは否定的な意味を持たない。マスコミで取り上げられるような「援助交際をする女子高生」と同一視されることを嫌っていても、経済活動の一手段としてテレクラを利用すること自体については、「別にテレクラじゃなくてもいいんだけど、テレクラがあるから利用してるだけでしょ」という以上の意見が出てこない。

「(女子高生を援助交際させないようにするためには)親がお小遣いをもっと上げて、

そんなことしないで済むようにしてあげればいいんだよ。」

「そう、お父さんの給料をもっと上げればいい。」

「日本の経済状況が悪いんだよね。」

「でも、オヤジとかにお金をあげたら、海外のバイシュン・ツアーとかに行っちゃうでしょ。悪循環なんだよね。」(全員笑)

「テレクラ男性」に対する蔑視同様に、性産業および成人男性の性に対する彼女たちなりの見方は、かなりシニカルである。事の本質をどこまで捉えているのかはともかく、彼女たちが語る女子高生像は、自己意志に基づいてテレクラを利用している、どこまでも能動的な存在である。

「自業自得」：テレクラでの被害とサポートシステム 大人社会がテレクラに対して抱く最大の憂慮は、若年層が「性の搾取」メカニズムにからめとられる事であろう。しかしながら、この点について、調査に参加した女子高生は無関心に近い反応を見せた。

「テレクラを利用した女子高生が後で困る問題って何？」という質問に対して、「望まない妊娠」と「補導」が挙げられたが、それ以上の自発的発言がない。ファシリテーター(調査者)が「同意しなかった事を強要されるってことは？」と促したところ、逆に「レイプ？(男性がセックスを目的としていたという事を)知らなかったじゃ、すまされないよ。」「テレクラは相手を見て選べるから(そんな事はめったに起こらない)…。」あるいは「そんなのバカじゃんってカ

ンジ。」という意見が相次ぎ、それを否定する他の参加者もいなかった。

極端な例ではあるが、「レイプ」も含めた性的強要について言えば、彼女たちの認識には明らかな間違いがある。テレクラを通じて知り合った相手と何らかの交渉をした時点で、性的な関わりを持つつもりがなかったとは言えないという発想は、性的強要の本質を理解していない社会の映し鏡そのものである。つまり、こうしたアナログ的発想の背景には、「寝た子を起すな」という考えのもと、然るべき情報も与えず、性の自己決定および自己防衛スキルの育成に無関心である大人社会がある。言う事を聞かなかったんだから罰を受けるのも仕方がない、といった「自業自得」論が女子高生たちの間に浸透することによって、潜在的风险にある子どもたちはますます孤立化していくのである。

そのことは、問題を抱えた同じ女子高生に対するサポート・システムについて、多くの参加者が無関心であったことが裏付けている。

「助けられる方法なんてないよ。」

「助けを求めるくらいだったら、最初からやらなきゃいいのに。」

「自分でやったことを何で世間一般の大人に押し付けなきゃいけないの、ってカンジ」

サポート・システムを実際に利用したことのない、聞いたことさえもない彼女たちにとって、それをイメージすることさえ難しいのかもしれないが、「自業自得」の概念から離れないことが、強く影響しているように思われた。特に気になったところでは、実際にテレクラを利用して援助交際を経験したこともあるという女子高生の発言である。

「何を相談するの？知らない人にそんな話すんのイヤだ。だったら、自分で黙ってるか、友達にだけ言う。」

「レイプされたりしたら、自分のことを全部公表しなきゃ、警察は捕まえてくんだいでしょ？親とか周りの人にも全部知られちゃうでしょ？テレクラしてたことも知られちゃうでしょ？…だから（解決策としては）、警察に行って、この人にレイプされました、って言ったらスグ捕まえてくれるようにすんの。面倒くさいことしなくても捕まえてくれるんだったらいい。」

「やっぱ、その人（女子高生）が悪いよ。」

望まない妊娠についても同様に、「物わがりのいい人が、墮ろす時に何にも言わないで保証人になってくれればいい」「（妊娠したという）キズは癒えるんじゃない？親が知らないって知ったら、少しは救われる。」という意見が聞かれ、精神的なサポートを求める声は全く聞かれなかった。ちなみに、「行動（テレクラ）したことを怒らないで、相談ののってくれるところがあってもいいよね」といったのは、3グループ34名中1名だけである。

## 結語

本調査の結果から、性情報の洪水の中を泳いで生活している現代の女子高生が、大人文化に対してかなりシニカルな目を養っており、ピアがテレクラを利用することについても「他人事」として不干渉の態度を保持していることが伺えた。そこには「不道德」という言葉こそ登場しなかったにせよ、リスクを抱えたピアに対して「一緒にされたくない」という明らかな心理的距離がある。また、テレクラを利用することによって派生するリスクについても、利用者、非利用者ともに「自業自得」と切り捨てる態度は、こうした女子高生に対するスティグマ化および孤立化を強く示唆するものであると考える。

筆者らは、「援助交際」を経験した元女子高生1名にインタビューを試みているが、そこでも「どんなこと（性感染症、レイプ、殺人）が起こってもしょうがないと思ってた」という発言が

聞かれた。同様のインタビューを数名に実施しているルポルタージュ本の中にもこうした「自業自得」論が繰り返し登場する<sup>5</sup>。

テレクラというのは、大人文化（男性）と子どもたち（女子高生）を結ぶ多くのコミュニケーション手段の一つでしかない。援助交際の元経験者は「テレクラがそこにあったから利用しただけ。別にテレクラでなくてもよかった。」という言葉はまさにそのことを裏付けている。問題の本質は、自己判断を偏った情報に頼り、必要なスキル（性の自己決定および自己防衛）をもたない女子高生が実際の危険に直面した時、社会から孤立した彼女たちが救われるのは、「自業自得」という納得の仕方しかないという構造にあると考えられる。

また、本調査の結果で特に留意すべき点は、サポート・システムに対する期待および関心が非常に低かったということである。これは、情報を持たないことだけに起因するものではなく、むしろ自分たちが必要とするものに対する認識の欠如に起因するものであると考える。「自業自得」論を合わせて考えた場合、自分のこころやからだに対する意識があまりにも低いことが懸念される。

女子高生の潜在的リスクに対するvulnerabilityを考える際、彼女たちに最も必要なことは、エンパワメントである。「搾取」の対象となることを恐れ、安全な場所に隔離しようとする発想ではなく、むしろ抵抗力をつけさせることが現実に則したアプローチであると考えるのである。エンパワメントの第一歩は、必要な情報の提供である。価値観の押し付けではなく、あくまでもバランスのとれた情報を基に彼女たちが思考するプロセスを助け、必要なスキル（性の自己決定および防衛）を発達させていくことを助けることが必要である。こうしたプロセスに、学校あるいは家庭内でのセクシュアリティ教育が果たす役割の重要性は言うまでもない。

## 文献

1. 「青少年と電話などに関する調査研究報告書」総務庁青少年対策本部、平成8年8月。
2. 「中・高校生の生活と意識に関する調査（中間報告）」東京都、1996。
3. 性の権利フォーラム編著『『淫行条例』13の疑問：少女売春はなくせるのか!?』現代人文社、1996。
4. 「青少年の性行動：わが国の中学生・高校生・大学生に関する調査報告（第4回）」日本性教育協会、1994。
5. 黒沼克史「援助交際：女子中高生の危険な放課後」文芸春秋、1996。

## ABSTRACT

### Japanese High School Girls' Perspectives on the Use of Telephone Clubs

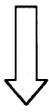
Yoshiki SAKURAI (International Medical Center of Japan)  
Yuko HIGASHI (Ochanomizu University)  
Chika Hyoudo (University of Tokyo)  
Akiko Takai (University of Tokyo)

With the rise of popularity of telephone clubs<sup>†</sup> in Japan over the past few years, there has been quite a lot of social attention focused on concerns that youth have too easy access to such clubs<sup>†</sup> where their physical and mental health may be at risk. The Ministry of General Affairs for Japan and several local governments have previously conducted research on high school students and their utilization of telephone clubs. While these were all quantitative studies, this research was conducted with a qualitative

---

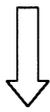
<sup>5</sup> 援助交際

approach centering on a focus group interview of 34 high school students in three groups. The purpose of the study was to identify the role of telephone clubs in their life. The results indicate that despite the mass media's depiction of high school students utilizing telephone clubs in a fashion similar to prostitution, most participants have tried calling telephone clubs only once or twice - just for fun or out of curiosity. This supports the results of the previous quantitative studies; however, it should be noted that those experienced with telephone clubs tended not to recognize the importance and the need to have a support system when confronted with risks. Various factors and problems related to high school students involved in the telephone club scene, as well as the role and importance of empowerment for young females to ensure their health are also discussed here.



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



### 要約

ここ数年間に急速に発達してきた「テレフォンクラブ(以下、テレクラ)」は、若者が身近に利用する電話を最大限に利用するものであるが故に、若年層の身体的・精神的健康面にも与える影響が懸念されている。高校生とテレクラの実態調査については、これまでも総務庁、あるいは各地方自治体が統計的資料を提出しているが、質的調査はほとんど実施されていない。本研究では、女子高校生にフォーカス・グループ・インタビューを実施し、彼女たちの生活とテレクラの位置関係を検討した。最近のマスコミでは、テレクラと女子高校生の性行動(それに伴う金銭の授受)が取り上げられるケースが多い。しかし、本調査に参加した女子高生の多くが「遊び」として1~2度体験しているだけであると答えており、これまでの統計資料とほぼ一致する結果が得られている。注目すべきは、実際に「援助交際」を経験している者もいるが、性感染症などの問題についてや、何らかの危険にさらされた場合の相談・支援システムの必要性に関する認識が希薄であったことである。本論では、インタビュー調査によって浮き彫りになった様々な問題を検討すると共に、彼女たちの健康を保証する上で「エンパワーメント(自ら力をつけること)」が果たす役割とその重要性について考察する。